

旧水戸街道
若柴宿
WAKASHIBA
観光案内板

江戸時代は水戸街道8番目の宿場として多くの旅人が往来し、大坂の曲がりから金龍寺まで500mあまりが若柴宿だ。明治19年の大火で大半が焼けたが、立派な門構えの旧家が多い。当時の巨樹、珍木も多く、かつての名残が随所に見られる。



水戸街道は、我孫子、布佐、布川を経由する道(布川道)と取手、藤代、小通りを通る道の合流点(若柴分岐、駒柴小横道標)から一本道になり、若柴宿の玄関口の大坂となっている。大坂の東側高台はかつての若柴城の北西端に当たり「外城」と呼ばれ、近くには矢竹が多く見られる。



祭神はササノオノミコト。江戸時代までは牛頭天王宮と呼ばれていた。創建は領主の岡見頼房公が村内の疫病退散のため京都の八坂神社から勧請した。天正2年(1574年)。現在も毎年7月27日から29日にかけて祇園祭が行われている。祇園祭では氏子による神輿担ぎが盛大に行われている。



スダジイの大木の間に小さな社が見える。そこを登って行くと「しゃもじ」がたくさんぶら下がった「闘(くじ)神社」がある。この神様を熱心に拝んだ江戸時代の町人が「大当たり」の富くじを取ったと云う伝承がある。「吉をメシトル」という事から入試、安産など諸々の願い事をしゃもじに書いて、祈願している。



星宮神社への参道が登りになる角に御手洗の池がある。現在は底の部分が湿っている程度のごく小さい池だ。かつてお参り前にここで手や口を浄め禊をした。伝承ではウナギ(星宮神社のお遣い)を誤って捕まえた時はこの池に放したと云われ、この土地では今でもウナギを食べないと目がつぶれるとか。



宿場の北のはずれにあり、入口に縁起の書かれた板札がある。それによると北斗七星や北極星が名前の由来との事だ。本殿横に「駒止の石」の説明札がある。常陸国太守平貞盛がここを通りかかると乗っていた馬が立ち止り、頑として動かない、あたりを見回すと祠があり、参拝すると馬は動き出したと伝えられている。



台地の根際にある道を言う、根絡道のこと。根が台地に巻き付く道から生じたもの。南西向きの傾斜面は密生した椎・檜などの照葉樹林で、道沿いにはやぶつばきが群生し、12月から4月にかけてがつばきの見ごろである。



会所(問屋場)は、江戸時代の村役人の詰め所であった。幕府の見回り役人の立ち寄り所でもあった。人足25人 伝馬25頭が常備されていた。横の坂は会所(問屋場)があったことから会所坂と呼ばれている。



曹洞宗の古刹、「牛になった小坊主」の民話のお寺である。そのしっぽで払子(ほっす)をつくり寺宝としている。新田義貞の子孫、由良国繁が上州太田からこの地に移封され、それに伴い菩提寺の金龍寺がここに移った(1666年)。新田家一族の墓や曹洞宗開祖の道元が中国から持ち帰った重要文化財「絹本著色十六羅漢像」がある。



昔、種井は町内ごとにあり、種粉を浸したり、手足や農具を洗うのに使われていた。最近、若柴の有志により底ざらいや土留など懸命な修復作業により、3ヶ所とも清水が湧き出るようになって、かつての面影を取り戻した。



会所(問屋場)は、江戸時代の村役人の詰め所であった。幕府の見回り役人の立ち寄り所でもあった。人足25人 伝馬25頭が常備されていた。横の坂は会所(問屋場)があったことから会所坂と呼ばれている。